

## 聖霊降臨後第9主日(特定15)

2011/8/14

聖マタイ福音書第15章21節～28節

於:聖パウロ教会 司祭 山口千寿

今日の福音書の物語の中で、イエスさまが仰ったお言葉は、先週のお言葉とは、非常に対照的です。

先週は、弟子たちだけが舟に乗ってガリラヤ湖を渡る途中で、嵐にあつて漕ぎ悩んでいるところに、イエスさまが湖の上を歩いて舟に近づいて来られた物語でした。弟子たちはイエスさまを見て、幽霊だと恐れました。イエスさまは、「わたした、安心しなさい。恐れることはない」と声をかけます。ペトロは、イエスさまだと分かると、自分も水の上を歩いてイエスさまのもとに行かせてくださいと願い、水の上に踏み出します。しかし、波を見て怖くなり、沈みそうになります。イエスさまはペトロを、「信仰の薄い者よ」とお叱りになりました。

この「信仰の薄い者よ」という言葉は、「信仰の小さい者よ」という意味です。ペトロの信仰をさして、小さな信仰だ、そのように言われたのです。普段からイエスさまに従って、寝食を共にし、身近にイエスさまの宣教活動を体験していた弟子たちですから、イエスさまに心の底から信頼を寄せることが出来たはずですが、そうではなかった。それでペトロの信仰を、小さな信仰だと、お叱りになったのです。

他方、今日の物語に出てくるカナンの女の信仰を、イエスさまは、「立派だ、偉大だ」とお褒めになったのです。この女性の信仰を、見上げた信仰だ、大きな信仰だと言って、イエスさまは称賛なさったのです。

この女性は、イスラエルよりは北の方の地中海沿岸のフェニキア地方に元々住んでいたカナン人という、ユダヤ人とは異なる民族に属する女性です。カナン人は、イスラエルの人々がヨシュアに率いられて、パレスチナに侵入する前からそこに住み着いていました。ティルスとシドンという古い町が代表的な都市です。恐らく、イエスさまの噂は聞いていたとしても、お目にかかるのは、この時、初めてでした。娘が悪霊に取りつかれていたというのですから、重い精神的な病に冒されていたのでしょう。

いつもイエスさまと行動を共にしていた弟子たちは、その信仰を小さいと言われ、この時、初めて出会った異邦の女性は、大きな信仰だとお褒めにあずかったのです。全く対照的な2つの物語だと言えるわけです。

わたしたちの信仰は、この女性のように立派だ、とイエスさまに褒めていただけるようなものでしょうか。それとも、弟子たちのように小さいとお叱りを受けるようなものでしょうか。皆さんの中で、ご自分の信仰が大きいと思っておられる方が、果たしてどれほどおられるでしょうか。おそらく、大多数の方が、自分の信仰は大きいなどとは、とてもおこがましく言えないと思っていられるのではないのでしょうか。それも、決して謙遜からではなくて、本気で小さな信仰でしかないと思っているのではないのでしょうか。

何故でしょうか。聖書や教会の教えについての知識が不足しているからでしょうか。しかし、豊富な知識があったとしても、それが即、大きな信仰というわけではありません。知識が豊かなことが信仰の深さと比例するのであれば、一生懸命勉強すれば、深い信仰を獲得することできることとなります。『東方キリスト教の世界』という本を書いている、ある国立大学の教授がいますが、その方はギリシャ正教やロシア正教についての知識は、本を書くほどありますが、自分は部外者だと言っています。日本ハリストス正教会の信徒ではないということです。知識と信仰は必ずしも結びつくものではありません。

確信よりも疑いの心の方が強いから、自分は信仰が浅いと感じるのでしょうか。でも、信仰に燃えているように見えても、他人の信仰生活を批判してばかりいて、信仰者としては余り尊敬されない人も、残念なことですが、いるのではないのでしょうか。熱していることと、信仰が立派だ、大きいと言うことは同じではないのです。

自分の信仰が小さいと感じるのは、祈りや聖書の学びに、また教会の活動や奉仕に自分を捧げることが不十分だと自覚しているからでしょうか。しかし、この世の生活に追われて、主日礼拝を守ることがやっとな人でも、深い霊的生活を送ることのできている人がいないわけではありません。

信仰が大きいか小さいかということは、信仰者にとっては、特別の思いをもって抱く関心事の一つです。しかし、自分の信仰が小さいからといって嘆くことはありません。信仰が小さいから何も出来ない決めつけることもないし、開き直ることも悪びれることもありません。それぞれが、与えられた信仰の量りに従って歩むのです。過大評価することもない

し、逆に過少評価することもないのです。パウロは、「神が各自に分け与えてくださった信仰の度合いに応じて慎み深く評価すべきです」と勧めています(ローマの信徒への手紙 12:3)。信仰の大小を問うことではなく、与えられているものを、どれだけ生かせるか、それが問題なのです。

この異邦の女性は特別なことを願ったわけではありません。自分の娘の癒しを願っただけです。悪霊に取りつかれて苦しんでいる娘が、悪霊から解放されることを願ったのです。親であれば、誰もが願うような願いです。子供が痛かったり苦しかったりすれば、それが取り除かれることを求めるのは、どの親でもすることです。この女性は、自分が苦しい息のもとにあって、それでも「御心が行われますように」などという模範的な祈りをしたわけではないのです。

御心が行われることを求めることは、確かに祈りの神髄です。イエスさまも主の祈りを弟子たちに教えて、御心になるように祈ることの大切さを示されました。そしてご自身も、ゲッセマネの園でそのように祈られました。しかし、この異邦の女性は、クリスチャンであろうがなかろうが、誰もがそのような状態にあれば、祈り求めることを叫びただけでした。娘の苦しみを自分の苦しみとして、「わたしを憐れんでくださいと」叫び求めたのです。

イエスさまはこの女性の叫びに対して、とても冷たい仕打ちをされています。わたしたちが抱いている優しいイエスさまというイメージを覆しかねないような冷淡な態度です。

初めは「何もお答えにならなかった」と書かれています。ただ黙っておられたのです。この女性は、自分が異邦の女にも拘わらず、ユダヤ人と同じように「ダビデの子よ」とイエスさまに呼びかけます。「ダビデの子」という呼び名は、「救い主」を表しています。ユダヤ人の救い主という意味です。カナンの方が、自分とは違う民族であるユダヤ人の救い主を、自分の救い主として呼ぶのです。自分の娘の救い主として呼ばれるのです。そこに救いがある、そこにしか救いがないとして呼ぶのです。娘の癒しのために、この女性は自分の生活が成り立っている共同体の外に抜け出ることをさえ、いとわなかったのです。

でもその呼びかけに、イエスさまは沈黙でもって答えるのです。沈黙しか返ってこないのです。答えが返ってこないことほど、人を不安に陥れることはありません。詩編83編を見ますと、「神よ、黙っていないで下さい。神よ、黙ったままでいいでください」(祈禱書)

と神さまに訴える言葉の繰り返しで始まっています。呼びかけても応答がないということは、どんなに不安になることでしょう。そして、そこから疑いの心が生じるのです。

しかし、イエスさまはお答えにならない。そればかりか、弟子たちが、この女性を邪魔者扱いして、「追っ払ってください」と願うと、「わたしは、イスラエルの家の失われた羊のところにしか遣わされていない」と、ご自分の使命を実行されるのは、イスラエルの中に於いてだけである、ご自分をイスラエルのための救い主であると限定して、異邦人のために遣わされているのではないと、あからさまに拒否します。

しかしこの女性は、イエスさまの沈黙や明らかな拒絶にあっても、ひるむことはありませんでした。イエスさまは、形の上では弟子の願いに対して答えているとしても、内容的には自分に対して答えてくださっている。たとえそれが否定的な答えであっても、自分に決して無関心ではないと感じ取ったのです。それで更にイエスさまの前にひれ伏して熱心に懇願します。「主よ、どうかお助けください。」ここで用いられている「助ける」という言葉は、「叫び」と「走る」という2つの言葉からなっています。叫びを聞いて駆けつける、それが助けることです。イエスさまに、離れたところに立ったままではなくて、悲鳴を上げているわたしのもとに駆け寄ってくださいと願ったのです。

3度目にイエスさまが言われたことは、「子供たちのパンをとって小犬にやってはいけない」という言葉でした。イスラエルの人々を子供、異邦人を小犬に譬えているわけですが、差別的とも思われる言葉です。

この女性は、イエスさまの言葉を肯定します。肯定した上で、「小犬も主人の食卓から落ちるパン屑はいただきます」と、大変機知に富んだ返答をします。家の主人はわざわざ小犬のためにパンを用意はしないかもしれませんが、でも、小犬も食卓から落ちるパン屑はいただくのです。子供も小犬も同じ主人によって養われるのです。そう言ったのです。

この答えが、イエスさまを揺り動かしました。イエスさまの態度を変えることになりました。「あなたの信仰は立派だ。あなたの願い通りになるように。」そう言って、娘はその時、癒されたのです。

イスラエルから始まった救いが、イスラエルという民族的な枠組みを越えて、異邦の世界にまで及んでいくことを、この物語は示しています。この女性は、神さまのご計画を損なうことなく、そのご計画の進展を促したのです。聖書の時代、イスラエルは大きな強い

民族ではありませんでした。弱い民族、弱小民族でした。その民族が選ばれて、神さまの救いの大きな働きが全世界にまで及ぶことを示すために、用いられたのです。

わたしたち日本の教会も、日本の社会の中では小さな教会です。弱い小さな信仰しかないかも知れません。しかし、この異邦の女性が、娘の病を自分自身の苦しみ以上のものとして受け止め、イエスさまの沈黙や拒否にも拘わらず叫び続けたことによって、イエスさまの宣教の前進が図られたように、わたしたちも、周りの問題を自分たちの問題として受け止めて祈るときに、祈りの中で神さまのご計画を尋ねるときに、神さまが大きく働いて下さることが起きてくると、この物語は告げています。

わたしたちも、身近な問題について、また、世界や社会の悩みについて、それらを自分の苦しみとして受け止め、ひるまず祈る時に、聖霊が大きく働いて下さることを確信して、祈り続けて参りましょう。